

Eureka XI

六年制通信 No.35 令和6年2月9日(金)号

スクール

少し前にこの通信で **student** の意味について書きました。末文で **Are you a student?** と問いかけましたが、覚えていますか。Yes, I am. と答えられましたかな。勉強する人 **student** の本当の意味は「情熱を傾けている人」だと書きましたが、では「勉強する」の反対は何でしょう。これがなかなか難しい。日本語では「勉強する」の反対語は何かと問われれば「遊ぶ」だと答えそうですが、「遊ぶ」を英語で何と言うかと聞かれると **play** と答えますよね。しかし、**play** は日本語の「遊ぶ」とは意味の守備範囲がずいぶん違うように思います。例えば、楽器の演奏や野球も **play** ですが、それを仕事にしている人もたくさんいるのですから「遊ぶ」という日本語のイメージではちょっと失礼な気がします。遊ぶにしても、一生懸命遊ぶという言い方があるように、「情熱を傾けて遊ぶ」ことができそうです。そうすると勉強にしても遊びにしても根本的に変わりがない、少なくともそういう部分があるように思います。マザー・テレサが「愛」の反対は「憎しみ」と問われ「憎しみではなく無関心だ」と答えましたが、これを参考に考えてみると「勉強」の反対は「無気力」ということになるでしょうか。「無気力」、「無関心」は英語では **apathy** でしょうね。いわゆる五月病（今の若者はこんな言葉を知っているのでしょうか）を **student apathy**（**student apathy**）と言いますが、あれです。アパシーの「ア」は否定語です。パシーは「パトス」つまり「情熱」、アパシーは「情熱を失うこと」です。確かに情熱を失ってしまえば、勉強だけでなく世の営みの全てができなくなってしまいます。アパシーになってはいけませんね。

さて、今日は **student** たちが集うスクールについて考えてみましょうか。スクール **school** の語源はわりと有名ですから、君たちも聞いたことがあるかもしれません。古典ギリシア語に遡りますが、語源辞典には **leisure** とあります。「余暇」ですな。ただ、日本語の「レジャー」は必ず娯楽と結びついています。が、**leisure** は必ずしもそういうわけではなく「仕事から解放された時間」という意味です。いわば「ゆとり」ということでしょうか、かの悪名高い「ゆとり教育」のように勉強の中身を減らして自由になる時間を増やすのではなく、労働から解放されることによって勉強に没頭できる時間が持てること、その時間が本来の **leisure** の意味なのです。他のことは考える必要がなく、勉強のできる精神的・時間的「ゆとり」、これがスクールのもともとの意味だというわけ。そうすると、この「ゆとり」を持つ者の集まりがスクールなのですね。

現実に自覚できると思いますが、君たちは労働から解放され、じっくり考える時間が与えられています。この幸せを実感できますか。以前ユリイカに書きましたが「勉強

のできる子」というのは成績のいい子だと、普通はそう考えるでしょうが、それは平和な国に生まれた者だけです。飢餓や戦争で勉強どころではない国（今もたくさんあります）に生まれた子どもたちにとって「勉強のできる子」とは、そういう環境にいることのできる子という意味です。成績がいいかどうかなど二の次です。勉強をしていられる幸せな子という意味なのです。君たちは、それこそグローバルな視点に立てば世界でも指折りの幸せな環境に生まれているのですよ。それで勉強しないとはどういうことか、という話ですよ。違いますか。

じっくり考えるという意味では、数学者の広中平祐の子どもの頃の思い出を読んだことがあるのですが、一つのエピソードを思い出します。小学校の時に幾何の問題に取り組んで、一週間だったか二週間だったか考え続けたというのです。そして独力で解法を見つけたときの感動が自分を数学者にしたと、確かそのようなことを書いておられたように思います。問題によっては正解があるのかわからない、そんな場合もあるわけですが、それでも考え続ける。それは精神を強靱にする有効な一つの方法に違いないでしょう。本来スクールの役割はそういう強靱な精神を鍛えることにあるはずですが、最近は正解がすでに示されており、それを当てるクイズのような問題を解くことを勉強だと学校では教えすぎているように思います。しかもすべての試験は減点方式です。そうすると、数値に現れることだけに関心を払いそれ以外を軽視する、そうになってしまいがちです。それが大学の合格を機に勉強をやめることに繋がっているように思います。もう一度本来のスクールの意義を確認しなくてははいけませんね。

今週のおすすめ

・小西マサテル 『名探偵じゃなくても』（宝島社）

このミス大賞受賞作『名探偵のままでいて』の続編です。出るのを楽しみにしていました。一年待ちました。認知症を患う元小学校長の祖父は、いわゆるアームチェアディテクティブ。安楽椅子探偵というやつで、現場に行くことなく情報だけを聞いて事件を解決するスーパー名探偵なわけ。推理がスーパー過ぎるくらいはありますが、さりげない伏線もすべて回収されて気持ちよく終わっています。また、もう一つの大切なプロットである孫娘楓の恋の行方ですが、同僚の岩田は小学校の先生、岩田の後輩の四季は劇団員、岩田と四季は楓に対して「抜け駆けはしない」という協定を結んでいます。今回はラストで楓はどちらかを選んでいきますから、推測しながら読んで下さい。

君たちはサスペンスの巨匠アルフレッド・ヒッチコックの名を知っていますか。「サイコ」、「裏窓」、「鳥」という映画も、観たことありますか。私は今でも「サイコ」のラストシーンは忘れられません。怖かったなあ。で、作者の小西さんはヒッチコックの信者かと思えるほど巨匠の作品を観ています。本書の「死を操る男」という章は正直ヒッチコックの作品を知らない人には謎解きの面白みがわからないと思います。でも、これを機に巨匠の作品を、白黒の作品も多いですが、観てみてはいかがでしょうか。

さて、あと一年待てばまた続編が出ますかね。私は期待しています。

BGMは 山根康広 の *Get Along Together* でした…。